



河合 凱夫(1921～1999)

中央小学校長などを務め、野田市の教育に尽力した河合由男は、凱夫という俳名を持ち、利根川水系の自然を背景にした作品を多く発表して「水の詩人」と称された俳人でもありました。

凱夫は小学生時代に担任教諭の導きにより俳誌「桜草」に入会し、「ホトギス」同人の岡安迷子から指導を受けます。

昭和11(1936)年、県立野田農学校の生徒であった凱夫は、俳句雑誌「南柯」野田支部の句会に初めて参加し、4年後には戸張錦秋の名で「南柯」同人となりました。

「南柯」で出会ったのが、共に戦後における野田の俳壇をリードすることになる佐藤雀仙人です。後に凱夫は「軸」の主宰に、雀仙人は「雑草」主宰となり、現在も刊行が続く両誌は、郷土の俳句雑誌として地域に根付いています。

入営の前に発表した第一句集「藤の實」には、14歳から22歳までの作品が収められました。

戦後には、「南柯」の拠点が戦禍で失われたことから、昭和20(1945)年に手書きの回覧雑誌「野葡萄」を刊行。終戦からわずか2か月の事で命名は雀仙人、帰還を祝い、岡安迷子からの句が寄せられました。

その後、俳句雑誌「麦」の主宰中島斌雄と出会い、その「麦」に入会。また、昭和42(1967)年に仲間と「軸」を創刊します。昭和47(1972)年には凱夫は主宰となり、小学校校長という教育者の責務と、主宰として文学者の美意識をその双肩に担い、孤高とも言える日常を歩み続けます。

掲句は、「軸」(平成11年8月1日発行)に掲載された凱夫最後の作品の内の1句です。病による急逝のため、凱夫がこの句が載る「軸」を手取ることはありませんでした。

腹部大動脈瘤の大手術も経験した凱夫でしたが、表題の写生句からは人生への諦念は感じられません。創作への意欲と愛し続けた水辺の風景が重なり合うことによって、戦中戦後を生き抜き、日常の中に美を見出した俳人の矜持が浮かび上がってくるようです。(文中敬称略)

【取材協力・写真提供】秋尾敏氏

【参考文献】『俳句の底力 下総俳壇に見る俳句の実相』(秋尾敏・東京四季出版)

河合 凱夫

かわい がいふ

ここに終らじ風の出口の菱の花

大正10(1921)年 3月8日、埼玉県北葛飾郡箕輪野江村(現在の吉川市)に生まれる(本名：戸張由男)

昭和11(1936)年 千葉県立野田農学校(現在は清水高等学校)在学中に「南柯」野田支部の句会に参加

昭和17(1942)年 第一句集「藤の實」を刊行

昭和20(1945)年 回覧雑誌「野葡萄」を創刊(のちに月刊誌となる)

昭和23(1948)年 結婚して河合姓になる

昭和37(1962)年 中島斌雄と出会い、「麦」に入会

昭和42(1967)年 俳誌「軸」を創刊

昭和47(1972)年 「軸」主宰となる

昭和49(1974)年 句集「飛礫」を刊行

昭和56(1981)年 野田市立中央小学校校長を退職

昭和62(1987)年 句集「草の罨」を刊行

平成5(1993)年 千葉県俳句作家協会会長となる

平成11(1999)年 7月29日、78歳で永眠



昭和42年創刊の「軸」
創刊号



昭和20年創刊の「野葡萄」
創刊号